

施餓鬼の經典

— 訳注『仏説救拔焰口餓鬼陀羅尼經』『仏説救面然餓鬼陀羅尼神呪經』—

教学研究委員会編

はしがき

施餓鬼会の典拠となつた阿難尊者と焰口餓鬼(面然餓鬼)との因縁を載せた經典としては、唐の実叉難陀(六五二〜七二〇)訳『救面然餓鬼陀羅尼神呪經』(以下、『面然餓鬼經』と略記)『一卷と、唐の不空(七〇五〜七七四)訳の『仏説救拔焰口餓鬼陀羅尼經』(以下、『焰口餓鬼經』と略記)『一卷、『瑜伽集要救阿難陀羅尼焰口軌儀經』一卷、『瑜伽集要焰口施食起教阿難陀緣由』一卷の計四種類が知られている。何れも『大正新脩大藏經』第二十一冊に収載されており簡単にみる事ができるが、『瑜伽集要』が冠せられた後半の二つは、宋・元の大藏經や高麗藏には入れられておらず、明藏以降に広く知られる様になつたものである。

四種類の中で一般に最もよく知られているのは弘法大師空海(七七四〜八三五)が大同元年(八〇六)に日本に將來したと言われる(『御請来目録』[55:106b]、不空訳の『焰口餓鬼經』)であり、内容的にもよく纏まっていたが、詳しい訳注書はこれまで作られておらず、読解するのに不便であつた。

そこで平成十五年度、教学研究委員会ではこの『焰口餓鬼經』を訳注の対象として取り上げ、その正確な理解を助けるために、同經の「異訳」(『仏書解説大辭典』第二卷・三五〇頁下段)とされる実叉難陀訳の『面然餓鬼經』

も併せて訳注を行うことにした。

訳注を行った両経には、済門の施餓鬼会に用いられる『開甘露門』に見える「焰口陀羅尼」(南無薩婆 嚩嚩伽多 嚩盧枳帝 唵 三摩囉 三摩囉 吽)が載せられており、その意味でも興味深い經典である。特に『焰口餓鬼經』所掲の陀羅尼はほぼ現用のものと同じ形となっている。

尚、『開甘露門』に載せられた施食に関わる残り二つの陀羅尼、つまり「施甘露水陀羅尼」(南無蘇嚩婆耶 多伽多耶 多姪唵 唵 蘇嚩蘇嚩 婆耶蘇嚩 婆耶蘇嚩 娑婆訶)と「施乳海陀羅尼」(南無三曼多 沒駄喃梵)の二つは何れも今回訳出から外した『瑜伽集要焰口施食起教阿難陀緣由』に載せられており(21・470c、471b 参照)、『開甘露門』の成立を考えるためにも訳出する必要性があると考えるが、経文の分量が多く、また所掲の陀羅尼も十四を数え、訳注作業に時間がかかるため別の機会に譲ることとした。

また訳注作業半ばの平成十五年七月に発売された『大法輪』八月号に、伊藤蓮空師(高野山真言宗密門会講師)による「現代意識『仏説救拔焰口餓鬼陀羅尼經』」が掲載されたが、参考するにとどめた。

(野口善敬)

〔凡例〕

○この訳注は、『仏説救抜焰口餓鬼陀羅尼經』及び『仏説救面然餓鬼陀羅尼神呪經』の訳注を「原文」「校注」「書き下し文」「語注」「口語訳」の順で掲載し、両經の比較を容易にするために上段を『焰口餓鬼經』、下段を『面然餓鬼經』とする二段組みとした。

○底本には磧砂藏本を用い、『焰口餓鬼經』は台湾新文豐出版公司影印出版の『宋版磧砂大藏經』第三四冊(p.513～528)所収本を、『面然餓鬼經』は同じく第一三冊(p.298)所収本を用いた。

○原文の文字の校勘には高麗藏本に拠っている『大正新脩大藏經』第二一冊所収の両經(No.1313、T21-464a～465b)及びNo.1314、T21-465c～466b)を使用し、【校注】として原文の後に付録した。

○原文は当用漢字を用い、書き下し文は現代かな使いとした。

○現代語訳は直訳を心掛けたが、必要と思われる場合は〔 〕で適宜ことばを補った。

○訳注作業に際しては段落分けを行い、担当者に割り当てて訳注を行い、合同で討議を行った。そのため、気を付けたつもりではあるが、担当者により訳語・付注などに若干の差異が存している。

○注に引用した書籍については、その初出の箇所を版本等を明記した。また大正大藏經・大日本統藏經(卍統藏)についてはそれぞれ「T」「Z」の略号を用いた。その他の略号は次の通り。

『中村』＝中村元『仏教語大辞典』(東京書籍)

『広説』＝同『広説仏教語大辞典』(同前)

『望月』＝望月信亨『仏教大辞典』(世界聖典刊行会)

『禅学』＝駒沢大学『新版禅学大辞典』(大修館書店)

『仏光』 〓 『仏光大辞典』（台湾仏光出版社）

『織田』 〓 織田得能『仏教大辞典』

『岩波』 〓 岩波『仏教辞典』

『大漢和』 〓 諸橋轍次『大漢和辞典』

○読書会に参加して原稿を分担して作成した担当者は次の五名である。（会にはオブザーバーとして今年度も玄侑宗久師が参加され、積極的な意見を頂戴した。）

朝山一玄・徳重寛道・並木優記・野口善敬・矢多弘範（あいうえお順）

『仏説救拔焰口餓鬼陀羅尼經』

【原文】

仏説救拔焰口餓鬼陀羅尼經

大興善寺三藏沙門大広智三不空奉詔訳

爾時世尊、在迦毗羅城三尼拘律那僧伽藍所、与諸大比丘并諸菩薩無數衆会、前後圍遶而為説法。

爾時阿難独居静処、念所受法。即於其夜三更已後、見一餓鬼名曰焰口。其形醜陋、身体枯瘦、口中火然、咽如針鋒、頭髮鬢乱、爪牙長利、甚可怖畏。住阿難前、白阿難言、却後三日、汝命将尽、即便生此餓鬼之中。是時阿難聞此語已、心生惶怖、問餓鬼言、若我死後生餓鬼者、行何方便、得免斯苦。

爾時餓鬼白阿難曰、汝於明日、若能布施百千那由佗三恒河沙數餓鬼并百千婆羅門仙等、以摩伽陀国所用之斛、各施一斛飲食、并及為我供養三宝、汝得增寿、令我離於餓鬼之苦、得生天上。

阿難見此焰口餓鬼身形羸瘦、枯焦極醜、口中火然、咽如針鋒、頭髮鬢乱、爪牙長利、又聞如是不順之語、甚大驚怖、身毛皆豎。

『仏説救面然餓鬼陀羅尼神呪經』

【原文】

仏説救面然餓鬼陀羅尼神呪經

唐于闐三藏実叉難陀訳

爾時世尊、在迦毗羅城三尼俱律那僧伽藍所、与諸比丘并諸菩薩無數衆生。周匝圍遶而為説法。

爾時阿難独居净処、一心繫念。即於其夜三更之後、見一餓鬼名曰面然。住阿難前、白阿難言、却後三日、汝命将尽、即便生此餓鬼之中。是時阿難聞此語已、心生惶怖、問餓鬼言、我此災禍、作何方計、得免斯苦。

爾時餓鬼報阿難言、汝於晨朝、若能布施百千那由他恒河沙數餓鬼并百千婆羅門及仙人等、以摩伽陀国斛、各施一斗飲食、并及為我供養三宝、汝得增寿、令我離於餓鬼之苦、得生天上。

阿難見此面然餓鬼、身形羸瘦、枯焦極醜、面上火然、其咽如針、頭髮鬢乱、毛爪長利、身如負重、又聞如是不順之語、甚大驚怖、身毛皆豎。

即從座起、疾至仏所、五体投地、頂礼仏足、身体顛慄、

而白仏言、願救我苦。所以者何、我住静処、念所授法、

見焰口餓鬼、而語我言、汝過三日、必当命尽、生餓鬼中。

我即問言、云何令我得免斯苦。餓鬼答言、汝今若能施

於百千那由佗恒河沙數餓鬼及百千婆羅門仙等種種飲

食、汝得增壽。世尊我今云何能弃若干餓鬼仙人等食。

爾時世尊告阿難言、汝今勿怖。我有方便、令汝能施若

千百千恒河沙餓鬼及諸婆羅門仙等種種飲食。勿生憂惱。

仏告阿難、有陀羅尼、名曰無量威徳自在光明殊勝妙力。

若有誦此陀羅尼者、即能充足俱胝那由佗百千恒河沙數

餓鬼及婆羅門仙等上妙飲食、如是等衆乃至一一皆得摩

伽陀国所用之斛七七斛食。

阿難、我於前世作婆羅門、於觀自在菩薩所、及世間自

在威徳如来所、受此陀羅尼故、能散施与無量餓鬼及諸

仙等種種飲食、令諸餓鬼解脱苦身、得生天上。阿難汝

今受持、福德壽命皆得增長。

爾時世尊即為阿難說陀羅尼曰、

莫莫薩嚩_(無可反、下同) 怛佗嚩哆_(引)

嚩路_(引) 枳帝_(引) 唵

即從座起、疾至仏所、五体投地、頂礼仏足、身心戰慄、

而白仏言、救我世尊、救我善逝。過此三日命將終尽。

昨夜見一面然餓鬼、而語我言、汝於三日、必当命尽、

生餓鬼中。我即問言、以何方計、得免斯苦。餓鬼答言、

汝若施於百千那由佗恒河沙數餓鬼、及百千婆羅門并諸

仙等飲食、汝得增壽。世尊我今云何得免此苦。

爾時世尊告阿難言、汝今勿怖。有異方便、令汝得施如

是餓鬼諸婆羅門及仙等食。勿生憂惱。

仏告阿難、有陀羅尼、名曰一切徳光無量威力。若有誦

此陀羅尼者、即成已施俱胝那由佗百千恒河沙數餓鬼、

及六十八俱胝那由佗百千婆羅門并諸仙等前、各有摩伽

陀斛四斛九斗飲食。

仏告阿難、我於前世曾為婆羅門時、於觀世音菩薩及世

間自在徳力如来所、受此陀羅尼。我当以此陀羅尼力便

得具足施於無量無數餓鬼及婆羅門并仙等食。以我施諸

餓鬼食故、捨離此身、得生天上。阿難、汝今受持此陀

羅尼、当自護身。

即說呪曰、

那麼薩縛_(無可反、下同) 怛他揭多_(去声、呼) 縛路枳帝_(引) 唵

引(三) 三(三) 跋羅(三) 三跋羅(三) 吽(三) 四

三(上) 吽(下) 跋(三) 羅(三) 虎(三) 吽(三) 四

仏告阿難、若有善男子善女人、欲求長壽福德增榮、速能滿足檀波羅蜜、每於晨朝及一切時、悉無障礙、取一淨器、盛以淨水、置少飲麩及諸餅餌等、以右手按器、誦前陀羅尼滿七遍、然後稱四如來名号。

仏言、阿難、若欲作此施食法者、先取飲食安置淨盤器中、誦此陀羅尼呪、呪食七遍、於門内立、展臂戶外、置槃淨地、彈指七下。

南謨多宝如來

毘謨婆(去) 誡喇帝(一) 鉢囉(二) 部(引) 哆囉怛曩(二) 野怛佗(引)

由称多宝如來名号加持故、能破一切諸鬼多生已來慳悋

惡業、罪障消滅、即得福德圓滿。

南謨妙色身如來

南謨(三) 妙色身如來(三) 素嚕(二) 播(引) 野怛佗(引) 誡跋野(二)

由称妙色身如來名号加持故、能破諸鬼醜陋惡形、即得色相具足。

南謨広博身如來

毘謨(引) 婆誡喇帝(一) 尾補羅誡(引) 怛囉(二) 野怛佗(引)

變哆野(二)

由称広博身如來名号加持故、能令諸鬼咽喉寬大、所施之食、恣意充飽。

南謨離怖畏如來

毘謨婆去 誡喇帝去 阿上婆去 孕迦囉引 野怛佗去

嚩唵引 野二

由稱離怖畏如來名号加持故、能令諸鬼一切恐怖悉皆除滅、離餓鬼趣。

仏告阿難、若族姓子等、稱四如來名号加持已、彈指七遍、取於食器於淨地上、展臂瀉之。作此施已、於其四方有百千那由佗恒河沙數餓鬼、前各各有摩伽陀国七七斛食。受此食已、悉皆飽滿。是諸鬼等、悉捨鬼身、生於天上。

阿難、若有比丘丘尼優婆塞優婆夷、常以此真言及四如來名号加持食施餓鬼、便能具足無量福德、則同供養百千俱胝如來功德等無差別、壽命延長、增益色力、善根具足、一切非人、夜叉羅刹、諸惡鬼神、不敢侵害。又能成就無量福德壽命。

若欲施諸婆羅門仙等、以淨飲食滿盛一器、即以前真言加持二七遍、投於淨流水中。如是作已、即為以天諸美妙飲食、供養百千俱胝恒河沙數婆羅門仙。彼諸仙人得加持食故、以呪威德、各各成就根本所願諸善功德、各

作此施已、於其四方、有百千俱胝那由他恒河沙數餓鬼、於一一餓鬼前、各有摩伽陀斛四斛九斗飲食、如是鬼等遍皆飽滿。是諸餓鬼、喫此食已、悉捨鬼身、尽得生天。復言、阿難、若比丘丘尼優婆塞優婆夷、若能常誦此陀羅尼并奉飲食、即為具足無量功德、命得延長、即成供養百千俱胝如來功德、顏色鮮潔、威德強記、一切非人步多鬼等、夜叉羅刹并諸餓鬼、皆畏是人、心不忍見。是人即為成就具足大力勤進。

復言、阿難、若欲施婆羅門及仙食者、当取飲食滿置鉢中、誦此陀羅尼呪、呪食七遍、瀉流水中、具足奉獻無量俱胝百千恒河沙數婆羅門及諸仙等、如天飲食。其婆羅門并仙人等、喫此食已、諸根具足、円滿吉祥、各發

各同時發誓願言、願施食人壽命延長、色力安樂。又令其人心所見聞、正解清淨、具足成就梵天威德、行梵天行。又同供養百千恒河沙如來功德、一切怨讎不能侵害。若比丘比丘尼優婆塞優婆夷、若欲供養佛法僧寶、應以香華及淨飲食、以前真言加持二十一遍、奉獻三宝。是善男子及善女人、則成以天餽饈上味、奉獻供養滿十方世界佛法僧寶、亦為讚歎勸請隨喜功德、恒為諸仏憶念稱讚、諸天善神恒來擁護、即為滿足檀波羅蜜。

阿難、汝隨我語、如法修行、広宣流布、令諸衆生普得見聞、獲無量福。是名救焰口餓鬼及苦衆生陀羅尼經。以是名字、汝當奉持。

一切大衆及阿難等、聞仏説已、一心信受、歡喜奉行。

仏説救拔焰口餓鬼陀羅尼經

【校注】

- (一) 大興Ⅱ大正蔵はこの上に「開府儀同三司 特進試鴻臚 卿肅國公 食邑三千戸 賜紫 贈司空 謚大監 正号 大広智」の三十一字有り。
- (二) 大広智Ⅱ大正蔵にこの三字無し。

其願、讚歎施人。其施食人、心得清淨、而便疾証梵天威德、常修淨行、具足成就供養百千俱胝恒河沙數如來功德、於諸怨敵而常得勝。

若比丘比丘尼優婆塞優婆夷、若欲供養一切三宝、應當具弁香華飲食、誦此陀羅尼呪、呪所施食及香華等二十一遍、供養三宝。此善男子善女人等、具足成就諸天妙供及無上供、尊重讚歎一切如來、刹土三宝、諸仏憶念、稱揚讚歎、諸天擁護。

仏言、汝去、阿難。當自護身、并及広為諸衆生説、令諸衆生成就具足無量功德、所生之世、常值百千俱胝諸仏。

仏説面然餓鬼陀羅尼經

【校注】

- (一) 大正蔵は「經」の下に「一卷」の二字あり。
- (二) 毗Ⅱ大正蔵は「毘」に作る。
- (三) 卍Ⅱ大正蔵は「卍」に作る。
- (四) 遶Ⅱ大正蔵は「繞」に作る。

- (三) 毗||大正蔵は「毘」に作る。
- (四) 拘||大正蔵は「俱」に作る。
- (五) 攀||大正蔵は「蓬」に作る。
- (六) 此||大正蔵は「於」に作る。
- (七) 曰||大正蔵は「言」に作る。
- (八) 佗||大正蔵は「他」に作る。
- (九) 攀||大正蔵は「蓬」に作る。
- (一〇) 爪牙||大正蔵は「毛爪」に作る。
- (一一) 顛||大正蔵は「戰」に作る。
- (一二) 佗||大正蔵は「他」に作る。
- (一三) 佗||大正蔵は「他」に作る。
- (一四) 自在||大正蔵は「世音」に作る。
- (一五) 曇莫||大正蔵は「那謨」に作る。
- (一六) 無可反下同||大正蔵にこの五字無し。
- (一七) 佗變跢||大正蔵は「他變多」に作る。
- (一八) 引||大正蔵は「引」に作る。
- (一九) 路||大正蔵は「廬」に作る。
- (二〇) 引||大正蔵に無し。
- (二一) 二||大正蔵に無し。
- (二二) 引三||大正蔵に無し。
- (二三) 三||大正蔵は「參」に作る。
- (二四) 去||大正蔵に無し。
- (二五) 跋||大正蔵は「婆」に作る。
- (二六) 羅||大正蔵は「囉」に作る。

- (五) 繫||大正蔵は「計」に作る。
- (六) 斛||大正蔵は「斗」に作る。
- (七) 攀||大正蔵は「蓬」に作る。
- (八) 豎||大正蔵は「豎」に作る。
- (九) 斛||大正蔵は「斗」に作る。
- (一〇) 呼||大正蔵は「呼之」に作る。
- (一一) 唵||大正蔵に無し。
- (一二) 褐||大正蔵は「褐」に作る。
- (一三) 吽||底本は左側部分が不鮮明であるが「許」に似る。今回は大正蔵に拠り「吽」に改めた。
- (一四) 二合三||底本は「三合二」に作るが明らかに誤りなので、大正蔵に拠り「二合三」に改めた。
- (一五) 盤||大正蔵は「槃」に作る。
- (一六) 下||底本は「下」に見えるが欠画である。大正蔵に拠って「下」に改めた。
- (一七) 斛||大正蔵は「斗」に作る。
- (一八) 鬼||大正蔵は「虚」に作る。
- (一九) 瀉||底本は「寫」に作るが、大正蔵の「瀉」に拠った。
- (二〇) 經||大正蔵は「神呪經」に作る。

- (二七) 三跋羅ニ大正蔵は「參婆囉」に作る。
- (二八) 引四ニ大正蔵に無し。
- (二九) 飲ニ大正蔵は「飯」に作る。
- (三〇) 飢ニ大正蔵は「食」に作る。
- (三一) 按ニ大正蔵は「加」に作る。
- (三二) 徧ニ大正蔵は「遍」に作る。
- (三三) 南謨多宝如来ニ大正蔵にこの六字無し。
- (三四) 去ニ大正蔵に無し。
- (三五) 一ニ大正蔵に無し。
- (三六) 二合ニ大正蔵はこの下に「枳孃二合」の四字有り。
- (三七) 哆ニ大正蔵は「多」に作る。
- (三八) 野怛佉引ニ大正蔵は「怛他」に作る。
- (三九) 嚩哆引ニ大正蔵は「嚩多」に作る。
- (四〇) 野二ニ大正蔵は「也」に作り、下に「此云多宝如来」という六字の割り注有り。
- (四一) 罪障消滅ニ大正蔵にこの四字無し。
- (四二) 得ニ底本は「徳」に作るが、大正蔵に拠つて改める。
- (四三) 南謨妙色身如来ニ大正蔵にこの七字無し。
- (四四) 曇護ニ大正蔵は「南縛」に作る。
- (四五) 縛ニ大正蔵は「囀」に作る。
- (四六) 一ニ大正蔵に無し。
- (四七) 二合ニ大正蔵に無し。
- (四八) 播ニ大正蔵は「波」に作る。
- (四九) 野怛佉引ニ大正蔵は「耶怛他」に作る。

- (五〇) 跣ニ大正蔵は「哆」に作る。
- (五一) 二ニ大正蔵にはこの字が無く、替わりに「此云南無妙色身如来」の九字の割り注有り。
- (五二) 南謨広博身如来ニ大正蔵にこの七字無し。
- (五三) 引ニ大正蔵に無し。
- (五四) 一ニ大正蔵に無し。
- (五五) 補羅ニ大正蔵は「鉢囉二合」に作る。
- (五六) 引ニ大正蔵にこの字は無く、替わりに「囉摩多」の三字が本文として入っている。
- (五七) 二合引ニ大正蔵は「二合」に作る。
- (五八) 野怛佗引ニ大正蔵は「也怛他」に作る。
- (五九) 嚩哆野ニ大正蔵は「摩多也」に作り、「二」の替わりに「此云広博身如来」の七字の割り注有り。
- (六〇) 博ニ大正蔵は「博」に作る。
- (六一) 南謨離怖畏如来ニ大正蔵にこの七字無し。
- (六二) 去ニ大正蔵に無し。
- (六三) 一ニ大正蔵に無し。
- (六四) 引ニ大正蔵に無し。
- (六五) 野怛佗去ニ大正蔵は「也怛他」に作る。
- (六六) 嚩哆引ニ大正蔵は「摩多」に作る。
- (六七) 野ニ大正蔵は「也」に作り、「二」の替わりに「此云離怖畏如来」の七字の割り注有り。
- (六八) 姓子ニ大正蔵は「姓善男子」に作る。
- (六九) 称ニ大正蔵は「既称」に作る。

- (七〇) 徧||大正蔵は「遍」に作る。
- (七一) 佗||大正蔵は「他」に作る。
- (七二) 各各有||大正蔵は「各有」に作る。
- (七三) 等悉||底本は「悉等」に作るが、四字句として切れないので、大正蔵に拗つて改めた。
- (七四) 真言||大正蔵は「密言」に作る。
- (七五) 施餓鬼||大正蔵は「施鬼」に作る。
- (七六) 真言||大正蔵は「密言」に作る。
- (七七) 徧||大正蔵は「遍」に作る。
- (七八) 諸||大正蔵は「仙」に作る。
- (七九) 飲||大正蔵は「之」に作る。
- (八〇) 呪||大正蔵は「密言」に作る。
- (八一) 施||大正蔵は「是」に作る。
- (八二) 壽命||大正蔵は「令寿」に作る。
- (八三) 怨||大正蔵は「冤」に作る。
- (八四) 真言||大正蔵は「密言」に作る。
- (八五) 徧||大正蔵は「遍」に作る。
- (八六) 及||大正蔵に無し。
- (八七) 餽||大正蔵は「餽」に作る。
- (八八) 世界||大正蔵は「界」に作る。
- (八九) 仏説||大正蔵に無し。

【書き下し文】

仏説救拔焰口餓鬼陀羅尼經

大興善寺の三蔵沙門、大広智不空、詔を奉じて訳す

爾の時、世尊、迦毗羅城の尼拘律那僧伽藍所に在つて、諸もろの大比丘並びに諸もろの菩薩、無数の衆と會し、前後圍遶せられて為に説法す。

爾の時、阿難、静処に独居し、受くる所の法を念ず。即ち其の夜の三更已後に於いて、一餓鬼見わる、名づけて焰口と曰う。其の形醜陋にして、身体枯瘦し、口中に火然え、咽、針鋒の如く、頭髮暴亂し、爪牙長く利く、甚だ怖畏す可し。

阿難の前に住まり、阿難に白して言う、「却後三日にして、汝の命將に尽きて、即便ち此の餓鬼の中に生ぜん」と。是の時、阿難、此の語を聞き已わりて、心に惶怖を生じ、餓鬼に問いて言う、「若し我れ死後に餓鬼に生ぜんとならば、何の方便を行わば、斯の苦を免るることを得んや」と。

爾の時、餓鬼、阿難に白して曰く、「汝、明日に於いて、若し能く百千那由他恒河沙数の餓鬼、並びに百千

【書き下し文】

仏説救面然餓鬼陀羅尼神呪經

唐の于闐の三蔵、実叉難陀訳す

爾の時、世尊、迦毗羅城の尼俱律那僧伽藍所に在りて、諸もろの比丘並びに諸もろの菩薩、無数の衆生と与なり。周市圍遶せられて為に説法す。

爾の時、阿難、淨処に独居し、一心に繫念するに、即ち其の夜の三更の後に於いて、一餓鬼見わる、名づけて面然と曰う。

阿難の前に住まりて、阿難に白して言う、「却後三日にして、汝の命將に尽きて、即便ち此の餓鬼の中に生ぜん」と。是の時阿難、此の語を聞き已わり、心に惶怖を生じて、餓鬼に問いて言う、「我が此の災禍、何の方計を作さば、斯の苦を免るることを得んや」と。

爾の時、餓鬼、阿難に報じて言う、「汝、晨朝に於いて、若し能く百千那由他恒河沙数の餓鬼、並びに百千婆羅

の婆羅門・仙等に布施するに、摩伽陀国にて用うる所の斛を以てして、各おの一斛の飲食を施し、井及びに我が為に三宝に供養せば、汝、寿を増すことを得、我をして餓鬼の苦を離れ、天上に生ずることを得しめん」と。

阿難、此の焰口餓鬼の身形羸瘦し、枯燥して極めて醜く、口中に火然え、咽、針鋒の如く、頭髮鬢乱し、爪牙長く利きを見、又た是くの如き不順の語を聞き、甚大だ驚怖し、身毛皆な豎つ。

即ち座従り起ちて、疾く仏の所に至り、五体投地して、仏足を頂礼し、身体顫慄して、仏に白して言う、「願わくは我が苦を救いたまえ。所以は何となれば、我、静処に住まりて、授かる所の法を念するに、焰口餓鬼見われて、我に語げて言う、「汝、三日を過ぎて、必ず命尽きて、餓鬼の中に生ぜん」と。我即ち問いて言う、「云何が我をして斯の苦を免るることを得しめん」と。餓鬼答えて言う、「汝今若し能く百千那由他恒河沙数の餓鬼及び百千の婆羅門・仙等に種種の飲食を施さば、

門、及び仙人等に布施するに、摩伽陀国の斛を以て、各おの一斗の飲食を施し、井及びに我が為に三宝に供養せば、汝、寿を増すことを得、我をして餓鬼の苦を離れ、天上に生ずることを得しめん」と。

阿難、此の面然餓鬼の、身形羸瘦し、枯燥して極めて醜くして、面上に火然え、其の咽、針の如くして、頭髮鬢乱し、毛爪長く利くして、身重を負うが如きを見、又た是くの如き不順の語を聞き、甚大だ驚怖して、身毛皆な豎つ。

即ち座従り起ちて、疾く仏の所に至り、五体投地して、仏足を頂礼し、身心戰慄して、仏に白して言う、「我を救いたまえ世尊よ。我を救いたまえ善逝よ。此れを過ぐることを三日にして命將に終せん」とす。昨夜、一面然餓鬼見われて、我に語げて言う、「汝、三日に於いて必ず命尽きて、餓鬼の中に生ぜん」と。我即ち問いて言う、「何の方計を以て、斯の苦を免るることを得んや」と。餓鬼答えて言う、「汝若し百千那由他恒河沙数の餓鬼及び百千婆羅門、井びに諸仙等に飲食を施

汝、寿を増すことを得ん」と。世尊よ、我今、云何が能く若干の餓鬼・仙人等の食を弁ぜん」と。爾の時、世尊、阿難に告げて言う、「汝今、怖るること勿かれ。我に方便有り、汝をして能く若干百千恒河沙の餓鬼及び諸もろの婆羅門・仙等に種種の飲食を施さしめん。憂惱を生ずること勿かれ」と。

仏、阿難に告ぐ、「陀羅尼有り、名づけて『無量威徳自在光明殊勝妙力』と曰う。若し此の陀羅尼を誦する者有らば、即ち能く俱胝那由佉百千恒河沙数の餓鬼及び婆羅門・仙等に上妙の飲食を充足し、是くの如き等の衆、乃至一一皆な摩伽陀国にて用うる所の斛もて七七斛の食を得ん。

阿難よ、我、前世に於いて婆羅門と作りしとき、觀自在菩薩の所、及び世間自在威徳如来の所に於いて、此の陀羅尼を受くるが故に、能く散じて無量の餓鬼及び諸仙等に種種の飲食を施与し、諸もろの餓鬼をして苦身を解脱し、天上に生ずることを得しむ。阿難よ、汝今受持せば、福德壽命、皆な増長することを得ん」と。

さば、汝、寿を増すことを得ん」と。世尊よ、我今、云何が此の苦を免ることを得ん」と。爾の時、世尊、阿難に告げて言う、「汝今、怖るること勿かれ。異方便有り、汝をして是くの如き餓鬼、諸もろの婆羅門及び仙等に食を施すことを得しめん。憂惱を生ずること勿かれ」と。

仏、阿難に告ぐ、「陀羅尼有り、名づけて『一切徳光無量威力』と曰う。若し此の陀羅尼を誦する者有らば、即ち俱胝那由他百千恒河沙数の餓鬼及び六十八俱胝那由他百千の婆羅門、並びに諸仙等に施すことを成じ已わり、前に各おの摩伽陀の斛にて四斛九斗の飲食有らん」と。

仏、阿難に告ぐ、「我、前世に於いて曾て婆羅門為りし時、觀世音菩薩及び世間自在徳力如来の所に於いて、此の陀羅尼を受く。我当に此の陀羅尼の力を以て、便ち無量無数の餓鬼及び婆羅門、並びに仙等に食を施すことを具足するを得。我、諸もろの餓鬼に食を施すを以ての故に、此の身を捨離して、天上に生ずることを得。阿難よ、汝今、此の陀羅尼を受持し、当に自ら身

爾の時、世尊、即ち阿難の為に陀羅尼を説きて曰く、

毘摩薩囉ナラマク ⑤⑥ サラバワツカ⑤⑥ 無可の反、下同じ。 怛佉婆タケアキヤ ⑤⑥ 去声、呪ふ。 唵路枳オヒロキ ⑤⑥ 去声、呪ふ。 帝唵テイオン ⑤⑥ 去声、呪ふ。 跋囉ハツラ ⑤⑥ 去声、呪ふ。 三跋囉サンハツラ ⑤⑥ 去声、呪ふ。 吽ウン ⑤⑥ 去声、呪ふ。

仏、阿難に告ぐ、「若しくは善男子、善女人有り、長寿にして福德増榮し、速やかに能く檀波羅蜜を満足し、毎に晨朝及び一切時に於いて、悉く障礙無からんことを求めんと欲せば、一淨器を取り、盛るに淨水を以てし、少しの飲麩及び諸もろの餅飴等を置き、右手を以て器を按じ、前の陀羅尼を誦すること満七徧して、然る後、四如来の名号を称えよ」と。

南謨多宝如来

毘摩薩囉ナラマク ⑤⑥ サラバワツカ⑤⑥ 無可の反、下同じ。 怛佉婆タケアキヤ ⑤⑥ 去声、呪ふ。 唵路枳オヒロキ ⑤⑥ 去声、呪ふ。 帝唵テイオン ⑤⑥ 去声、呪ふ。 跋囉ハツラ ⑤⑥ 去声、呪ふ。 三跋囉サンハツラ ⑤⑥ 去声、呪ふ。 吽ウン ⑤⑥ 去声、呪ふ。

囉佉囉ラケラ ⑤⑥ 去声、呪ふ。 野佉佉ヤケケ ⑤⑥ 去声、呪ふ。 唵哆哩オンダリ ⑤⑥ 去声、呪ふ。 野ヤ ⑤⑥ 去声、呪ふ。

多宝如来の名号を称えて加持するに由るが故に、能く一切諸鬼の多生已来の慳吝の悪業を破り、罪障消滅し、即ち福德円満なることを得ん。

南謨妙色身如来

毘摩薩囉ナラマク ⑤⑥ サラバワツカ⑤⑥ 無可の反、下同じ。 怛佉婆タケアキヤ ⑤⑥ 去声、呪ふ。 唵路枳オヒロキ ⑤⑥ 去声、呪ふ。 帝唵テイオン ⑤⑥ 去声、呪ふ。 跋囉ハツラ ⑤⑥ 去声、呪ふ。 三跋囉サンハツラ ⑤⑥ 去声、呪ふ。 吽ウン ⑤⑥ 去声、呪ふ。

を護るべし」と。

即ち呪を説きて曰く、

那摩薩縛ナモサラバ ⑤⑥ 去声、呪ふ。 怛他揭多タケアキヤ ⑤⑥ 去声、呪ふ。 縛路枳帝オヒロキ ⑤⑥ 去声、呪ふ。 唵三オンサン ⑤⑥ 去声、呪ふ。 跋囉ハツラ ⑤⑥ 去声、呪ふ。 三跋囉サンハツラ ⑤⑥ 去声、呪ふ。 虎吽コウン ⑤⑥ 去声、呪ふ。

仏言う、「阿難よ、若し此の施食の法を作さんと欲する者は、先ず飲食を取りて淨らかな盤器の中に安置し、此の陀羅尼呪を誦して、食に呪すること七遍し、門内に於いて立ちて、臂を戸外に展ばし、槃を淨地に置き、弾指すること七下せよ。

譏野

妙色身如来の名号を称えて加持するに由るが故に、能く諸もろの鬼の、醜陋悪形なるを破り、即ち色相具足

することを得ん。

南謨広博身如来

南謨 廣博身如来 尾補羅識 野 恒囉

野 恒囉

広博身如来の名号を称えて加持するに由るが故に、能く諸もろの鬼の咽喉をして寛大ならしめ、施す所の食

もて、恣意充飽せしめん。

南謨離怖畏如来

南謨 離怖畏如来

南謨 離怖畏如来 阿上 婆 孕迦

囉 野 恒囉 野

離怖畏如来の名号を称えて加持するに由るが故に、能く諸もろの鬼の一切の恐怖をして悉皆く除滅し、餓鬼

趣を離れしめん」と。

仏、阿難に告ぐ、「若しくは族姓子等、四如来の名号

を称えて加持し已わらば、彈指すること七徧し、食器

を淨地の上に取りて、臂を展して之を瀉げ。此の施を

て、各おの摩伽陀の斛にて四斛九斗の飲食有り、是く

此の施を作し已わらば、其の四方に於いて、百千俱胝那由他恒河沙数の餓鬼有るも、一一の餓鬼の前に於いて、各おの摩伽陀の斛にて四斛九斗の飲食有り、是く

作し已^おわらば、其の四方に於いて百千那由佗恒河沙数の餓鬼有るも、前に各^まおの摩伽陀国の七七斛の食有らん。此の食を受け已^おわらば、悉^{ことごと}く飽満し、是の諸もろの鬼等は、悉^{ことごと}く鬼身を捨てて、天上に生ぜん」と。阿難よ、若しくは比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷有つて、常に此の真言^(四)及び四如来の名号を以つて食に加持^(七)して餓鬼に施さば、便^すち能^よく無量の福德を具足せん。則ち百千俱胝^(一)の如来に供養する功德に同じく、等しくして差別無く、寿命延長し、色力を増益し、善根具足し、一切の非人、夜叉^(二)、羅刹^(三)、諸もろの悪鬼神も、敢^あえて侵害せず、又た能^よく無量の福德と寿命を成就せん。

若し諸もろの婆羅門^(六)、仙等に施さんと欲せば、淨らかな飲食を以て一器に満盛し、即ち前の真言を以て加持すること二七遍して、淨らかな流水の中に投ぜよ。是くの如く作し已^おわらば、即ち天の諸もろの美妙なる飲食を以て、百千俱胝恒河沙数の婆羅門仙に供養することとを為す。彼の諸もろの仙人、加持せる食を得るが故に、呪の威徳を以て、各各根本所願の諸もろの善功德

の如き鬼等、遍^おく皆な飽満し、是の諸もろの餓鬼、此の食を喫し已^おわらば、悉^{ことごと}く鬼身を捨てて、尽^{ことごと}く天に生ずることを得ん」と。

復た言う、「阿難よ、若しくは比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、若し能^よく常に此の陀羅尼を誦し、並びに飲食を奉ぜば、即ち為に無量の功德を具足し、命、延長することを得、即ち百千俱胝の如来に供養する功德を成じて、顔色鮮潔、威徳強記ありて、一切の非人、歩多鬼等、夜叉・羅刹並びに諸もろの餓鬼、皆な是の人を畏れて、心、見るに忍びざらん。是の人、即ち為に大力勤進を成就具足せん」と。

復た言う、「阿難よ、若し婆羅門及び仙に食を施さんと欲する者は、当に飲食を取りて鉢中に満置し、此の陀羅尼呪を誦すべし。食に呪すること七遍し、流水の中に瀉がば、無量俱胝百千恒河沙数の婆羅門、及び諸仙等に、天の如き飲食を具足奉獻せん。其の婆羅門、並びに仙人等、此の食を喫し已^おわらば、諸根具足し、円満吉祥ならん。各おの其の願を發して、施す人

を成就し、各各同時に誓願を発して言わん、『願わくは食を施すの人、寿命延長し、色力安樂ならんことを。又た其の人の心の見聞する所をして、正解清淨ならしめ、梵天の威徳を具足成就して、梵天の行を行ぜしめんことを。又た百千恒河沙の如来に供養する功徳に同じく、一切の怨讎侵害すること能わざらんことを』と。

若しくは比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、若し仏法僧宝に供養せんと欲せば、応に香華及び淨らかな飲食を以てし、前の真言を以て加持すること二十一遍して、三宝に奉獻せよ。是の善男子及び善女人、則ち天餽饌上味を以て満十方世界の仏法僧宝に奉獻供養すること成じ、亦た讚歎勸請隨喜の功徳を為して、恒に諸仏に憶念稱讚せられ、諸天善神、恒に來たりて擁護し、即ち檀波羅蜜を満足することを為さん。

阿難よ、汝、我が語に隨いて、如法に修行し、広宣流布して、諸もろの衆生をして普く見聞することを得て、無量の福を獲さしめよ。是れを『救焰口餓鬼及苦衆生陀羅尼經』と名づく。是の名字を以て、汝当に奉持す

を讚歎せん、『其の食を施す人、心、清淨なることを得て、便ち疾く梵天の威徳を証して、常に淨行を修し、百千俱胝恒河沙数の如来に供養する功徳を具足成就して、諸もろの怨敵に於いて常に勝つことを得んことを』と。

若しくは比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、若し一切の三宝に供養せんと欲せば、應當香華飲食を具弁して、此の陀羅尼呪を誦し、施す所の食及び香華等に呪すること二十一遍して、三宝に供養すべし。此の善男子、善女人等、諸天の妙供及び無上の供を具足成就して、一切の如来と刹土の三宝とを尊重讚歎し、諸仏は憶念して、稱揚讚歎し、諸天擁護せん」と。

仏言う、「汝去れ、阿難よ。當に自ら身を護り、并及びに廣く諸もろの衆生の為に説きて、諸もろの衆生をして無量の功徳を成就具足し、生ずる所の世、常に百千俱胝の諸仏に値わしむべし」と。

べし」と。

一切の大衆、及び阿難等、仏の説を聞き已^おわり、一心に信受して、歡喜奉行す。

『仏説救拔焰口餓鬼陀羅尼經』

『仏説面然餓鬼陀羅尼經』

【語注】

(1) 大興善寺Ⅱ西安の南二・五キロに位置する。興善寺ともいう。隋の文帝が長安の南東に大興城を興し、遵善坊の左に寺を建ててはじめは遵善寺と称していた。寺領が広大であることに加えて堂塔も勇壯で、隋唐以来の長安第一の寺とされ、各地から学僧が集まって寺は非常に栄えた。隋の開皇年間(五八九〜六〇〇)にはインド僧の闍那崛多、達摩笈多などが前後して長安にやって来て、この寺に住して密教を伝えた。唐代には普無畏、金剛智、不空の三人がここにとどまって密教經典を訳した。当時この寺は長安三大訳經場の一つとされていた。(『仏光』p.887)

(2) 不空Ⅱインド名 Amoghavajra。神龜元年(大曆九年(七〇五〜七七四))。北印度の人(一説にスリランカ)。賜号は大広智三藏。羅什・真諦・玄奘とならぶ四大翻譯家の一人。中國密教の大成者。真言宗付法の第六祖。バラモンの出身。金剛智三藏に師事して十五歳で得度、金剛頂經系の密教を学ぶ。師の死後、遺言に随ってスリランカに渡り梵本

【語注】

(1) 于闐Ⅱタリム盆地南辺のオアシス都市國家。天山南路南道の要地にあり、東西貿易の中継市場として漢代から繁栄し、唐代には安西四鎮の一つとなった。良質の玉を産し、また仏教東伝に大きな役割を果たした。

(2) 実叉難陀Ⅱインド名 sikṣānanda。永徽三年(景雲元年(六五二〜七一〇))。学喜三藏と称する。于闐出身の訳經僧で、唐の則天武后の時代に中国に入り、証聖元年(六九五)〜聖曆二年(六九九)にかけて菩提流支や義淨とともに『八十華嚴』(新訳華嚴經)を訳出した。また、『入楞伽經』七卷をはじめ、十九部の經典を訳出。長安四年(七〇四)に掃国したが、再三の要請によって景龍二年(七〇八)に再び中国に至り、大薦福寺に住して景雲元年(七一〇)に五九歳で示寂した。(『仏典入門辞典』p.523)

(3) 淨処Ⅱ清淨な場所。けがれないところ。(『大漢和』⑦ p.26)

(4) 繫念Ⅱ一所に思いをかけて、他のことを思わないこと。

五〇〇部の密教論典を持ち長安に帰り翻訳事業を行う。玄宗・肅宗・代宗の唐王朝三代の皇帝の信任篤く灌頂を受け、降雨・止雨の秘法を修し靈験をあらわす。その翻訳の多くは金剛頂經系に属する。(『仏典入門辞典』p.546)

(3) 迦毗羅城ニ釈尊の故郷の町で、釈尊の属した釈迦族の首都。現在のネパールのタラーイ地方、ティロラコット付近にあたる。梵語Kapilavastu。迦毘羅衛と音写される。(『望月』p.459『岩波』p.127『仏光』p.3963)

(4) 尼拘律那ニヤグローダ樹。パニヤン樹。梵語nyagrodhaの音写。長大な喬木で枝葉がよく繁茂し、木陰では厳しい日光を避けることができる。修行者がこの木の下に止住することもある。その種子はとても小さく、僅かな布施でも仏への供養は大きな果報をもたらすことを示す際の譬喩として多くの仏典にその名が用いられる。迦毘羅城南方のニヤグローダ樹園は、釈尊が成道の後に帰郷して父王等のために説法した場所として知られる。(『望月』p.4024『中村広説』p.1301)

(5) 僧伽藍ニ僧院。僧園。多数の出家修行者が共住して修行する清浄閑静な場所。梵語sangharamaの音写。僧伽藍摩と表される場合もある。(『望月』p.3040『中村広説』p.1061p.224『伽藍』)

(6) 静処ニ静かな場所。一人でいる場所。梵語rahogaya。森林の中の静かな場所。梵語aranya。(『中村広説』p.866)

(7) 三更ニ「更」は夜間の時刻の変わりめ。日没から夜明けま

心をとどめること。(『中村広説』p.385)

(5) 面然ニ原語は mukhaṅgīyā (火の燃え盛る口または顔を持つ者)。顔が炎に包まれているさま、あるいは口から火を吹くさまを表す。「焰口」と漢訳される場合もある。(『望月』p.2907『施餓鬼会』『仏光』p.5065)

(6) 方計ニ方法。方便。前出「方便」の項も参照。(『中村広説』p.1502)

(7) 晨朝ニ明け方。早朝。また、昼を三時に分けたうちの卯の刻から巳の刻(午前六時〜十時)をいう。(『中村広説』p.967『大漢和』⑤ p.886)

(8) 毛爪ニ体毛と爪。

(9) 善逝ニぜんぜい。梵語samyakの漢訳語で、「修伽陀」しゆがだ、「須伽陀」などと音写する。原意は「よくゆきし人」であり、幸福な人、完成した者、よく悟りに到達した人をも意味し、仏のことを指称する。(『岩波』p.502)

(10) 那麼ニ以下、読みは原則として坂内龍雄『真言陀羅尼』(平河出版社・一九八一、p.23)所掲の「慣用音」に従い、反切などで指示がある箇所はそれに従って変更を加えたが、「那麼」の二字は「ナウマク」と読めないので一般の音で表記した。

(11) 呼ニ大正蔵は「呼之」に作る。「多」の字だけは別の字より大きな声で誦える意か。

(12) 上声ニ「三」には上平と去声しかないが、ここでは特に上声(第三声)で誦えよという指示であろう。

を五分して、約二時間ごとに区分する。夜番の者が更代する時刻を表したことに拠る。現在の時刻では「初更」は午後八時、「二更」は午後十時、「三更」は午前零時、「四更」は午前二時、「五更」は午前四時。〔中村広説〕p.571、「大漢和」① p.466〔五更〕)

(8) 餓鬼＝梵語 *preta* は「死せる者」「逝きし者」を意味し、元来は死者の魂、祖霊を表す語。仏教に取り入れられて、飢えて食物を待つ死者を表すようになった。六道輪廻の中、餓鬼道に住む者。悪業の報いとして飢渴に苦しむ亡者。常に飢えと渴きに苦しんでいる者。〔中村広説〕p.192、「岩波」p.109)

(9) 焰口＝原語は *muhaga-jala* (火の燃え盛る口または顔を持つ者)。口から火を吹くさま。あるいは顔が炎に包まれているさまを表す。「面然」と漢訳される場合もある。〔望月〕p.2907「施餓鬼会」「仏光」p.5065)

(10) 醜陋＝容貌が醜く卑しいさま。〔大漢和〕① p.389)

(11) 枯瘦＝枯れて瘦せる。瘦せ衰える。〔大漢和〕⑥ p.250)

(12) 針鋒＝針の先。微細であること、極めて細いさまの譬喩。〔大漢和〕⑩ p.599〔鍼鋒〕)

(13) 殺乱＝髪が乱れるさま。〔大漢和〕⑫ p.645)

(14) 爪牙＝爪と牙。爪と歯。〔大漢和〕⑦ p.564)

(15) 却後＝そのち。あとで。「却」も後の意。六朝以来の古い俗語。宋代以降は用いられなくなった。〔禪語辞典〕p.83)

(16) 惶怖＝恐れる。恐れおののく。「惶」は心が動揺すること。

(13) 鞞羯反＝「跋」の音は、鞞(Hi)のHと羯(Kats)のatsuを併せて「ハツ」となる。

(14) 二合＝虎(Hu)と吽(un)の二字を一拍として一字分の長さで読めという意味であろう。

(15) 強記＝きょうき、記憶力の良いこと〔大漢和〕④ p.761)。但し、これでは上の「威徳」と繋がらない。推測であるが、勢力や元氣などが盛んな様を表す「強氣」〔大漢和〕同のことか。

(16) 歩多鬼＝不明。浮茶鬼のことか。浮茶鬼は *puana* の音写で、臭餓鬼と漢訳する。餓鬼のなかでは福の最も優れたものという。〔中村広説〕p.148)

(17) 大力＝一、偉大な力、また、すぐれた能力を表す。2、三昧の一種。〔中村広説〕中 p.1138)

(18) 勳進＝勉力進取〔漢語大詞典〕② p.819)。つとめて進み求めること。

(19) 諸根＝眼耳鼻舌身の五根。〔中村広説〕中 p.917)

(20) 円満＝みたすこと、成就すること、願いが実現すること。〔中村広説〕上 p.146)

(21) 吉祥＝めでたいうこと、安穩なる心のやすらぎ。〔広辞苑〕

(22) 淨行＝サンスクリット *Dharma-carya* の音写。清らかな生き方、また、清らかな行いに努めている人。〔中村広説〕中 p.843)

(23) 利土＝國、國土。 *keseta* の音写である「利」に漢訳の土を加えたもの。〔中村広説〕中 p.1016)

- (16) 『大漢語林』p.544)
- (17) 方便ニ巧みな手段。特に、衆生を導くためのすぐれた教化方法をいう。梵語 *upāya*。(『岩波』p.729)
- (18) 那由他ニ数の単位。極めて大きい数。梵語 *naṅya* の音写。「那由多」と表されることもある。具体的には一千億を指すとされる場合が多いが、その他にも千万、一兆など、異説が多い。(『中村広説』p.1278、『岩波』p.624、『仏光』p.3022)
- (19) 恒河沙ニガンジス川の砂のようによく多いさま。数え切れないほど数が多いことの譬喩。「恒河」はガンジス河を表す梵語 *ganga* の音写。(『中村広説』p.429、『岩波』p.248)
- (20) 婆羅門ニバラモン。司祭者。インドにおける四姓(カースト)のうち、最高位の者。梵語 *brahmana* の音写。(『中村広説』p.1369、『岩波』p.667)
- (21) 仙ニインド一般に存在する行者。聖仙。仙人。梵語 *ṣṛ*。(『中村広説』p.1021)
- (22) 摩伽陀国ニマガダ国。梵語 *magadha*。インドのビハール州、ガンジス河南部の古称。古代インドで強大であった国で、首都王舎城(梵語 *raḡagha*)は釈尊が最も長く居住した地で、竹林園や靈鷲山などでしばしば説法を行ったことで知られる。(『岩波』p.757p.85「王舎城」)
- (23) 斛ニ容積を量る容器の名称。また、容積の単位。石。一斗の十倍。周代の一斗は約十九・四リットル。また、容積を量る容器の名称でもある。(『大漢和』⑤ p.613、『大漢語林』p.633)
- (24) 俱胝ニ梵語「コーテイ(*koṭi*)」の音写。数の単位で十の七乗。(『中村』p.269)ここでは、数え切れない程非常に多くの数を表す。

- (24) 羸瘦_レやせ衰える。疲れやせる。〔大漢和₁⑨ p.92〕
- (25) 枯焦_レ枯れ疲れる。枯れ乾く。〔大漢和₁⑨ p.250「枯焦」、
⑦ p.521「焦」〕
- (26) 不順_レ道理に合わない。道にたがう。〔大漢和₁① p.248〕
- (27) 五体投地_レ五体とは全身のこと。全身をその前に投げ伏して
仏や高僧、師匠(guru)などを礼拝する。インドにおいて最も丁寧な礼拝の仕方。現実には仏像や仏塔、僧侶に対して額と両肘。両膝を地に着けて礼拝する。〔岩波₁ p.277〕
- (28) 頂礼_レ古代インドにおける最高の敬礼法で、尊者の足下にひれ伏し、頭の先を地につける。仏教でも仏の両足に頭をつけるのを(頂礼仏足)といい、両手両足頭を地につける五体投地は最上の敬礼法とされる。〔岩波₁ p.579〕
- (29) 顛慄_レ戦慄と同義。ふるえおののくこと。
- (30) 方便_レ接近する、到達する、という意味の動詞から派生した梵語の upāya であり、衆生を導くためのすぐれた教化方法、巧みな手段を意味する。方便は真実と対になる概念で、衆生に真実を明かすまでの暫定的な手段を意味する。
〔岩波₁ p.729〕
- (31) 俱胝_レ koti の音写。数の単位で十の七乗。十万・千万、あるいは億・万億または京とする。〔中村₁ p.269〕
- (32) 観自在菩薩_レ慈悲、救済を特色とした菩薩の名。梵語名は Avalokiteśvara (観察する) に自在な、の意)。〔岩波₁ p.146〕
- (33) 世間自在威徳如来_レ そのままの名称は辞書類に見えない

が、『望月仏教大辞典』第三冊「世自在王仏」条によれば、「救抜焰口餓鬼陀羅尼經」には、釈尊が過去に婆羅門たりし時、觀世音菩薩及び世間自在威徳如来の所に於て餓鬼陀羅尼を受け施を散じたることを記せり。此の中、世間自在威徳如来は恐らく世自在王仏と同一梵名なるべし」(p.2921)と言う。

(34) 福徳 〓 功徳、一切の善行とそこから生じる福利を意味する。(『中村広説』下 p.1429)

(35) 鼻莫薩 嚕 〓 以下の呪は「焰口陀羅尼」と呼ばれ、『開甘罽門』に入れられている。但し、文字表記は大きく異なっていて、「南無薩婆、吽哆伽多、嚕盧枳帝、唵、三摩囉、三摩囉、吽」となっており、読みは「ナムサボー、トトギヤトー、ポリヨキチイ、エン、サンモラー、サンモラー、キン」となっている。「焰口陀羅尼」については木村俊彦・竹中智泰著『禪宗の陀羅尼』(大東出版社)に注釈が載せられている。和訳は「一切如来に觀察されしものに帰依いたします。オーム。保ちたまえ、保ちたまえ。フーン」となり、還元梵文は「*namah sarvatathāgatavalokite om sambhara sambhara hum.*」となる。尚、今回、呪の読み仮名については、坂内龍雄『真言陀羅尼』(平河出版社・一九八一、p.223)所掲の「慣用音」に従い、反切などで指示がある箇所はそれに従って変更を加えた。

(36) 鼻護 〓 以下の「南護」「那摩」も同じで、一般には「南無」と書かれることが多い。感嘆詞 *namas* (頭を下げる・敬礼する・帰依する) の終止形 *namah*。与格名詞あるいは対格

名詞・処格名詞を支配して「〜に帰依する」の意を表わす。

- (37) 薩喃恒佉婆𑖀𑖄 形容詞 *sata* (一切の・全ての) と名詞 *taṭṭāgata* (如来) ・および動詞 *ava/lok* (見る・観察する・認める) の過去受動分詞形 *avalokita* (観察されたもの) の複合語 *sarva-taṭṭāgata-avalokita* の男性・単数・処格形 *sarva-taṭṭāgatavalokite* (一切如来に観察されしものに) の意。この陀羅尼が観世音菩薩及び世間自在威徳如来から受けたとされることから、「禪宗の陀羅尼」(p.165)にある如く、*avalokita* から *avalokita-īvara* (観自在菩薩) が連想されるが、確かに文法的には無理があろう。
- (38) 無可反 \parallel 反は反切のことで、漢字の発音表示法。二つの漢字を使って一つの漢字の音を示す。具体的には上の字の始めの子音と、下の字の母音とを組み合わせるもので、ここでは無(Bu)の子音のBと可(Ka)の母音のaとを足してバ(Ba)となる。
- (39) 𑖀 \parallel 同じ文字は『大漢和辞典』などの字書類に見えない。恐らく孽の誤りであろう。孽は孽と同字であり、音はゲツである。

- (40) 唵 \parallel 聖音 om の音写。訳出は困難。「ダラニ等の呪文の冒頭に唱えられる聖音。元来ウパニシャッド文献等にみえて、神秘的な意味をもち、密教では大日如来そのものをあらわすともいわれる」(『禪宗の陀羅尼』p.118)。

- (41) 去 \parallel 去声のこと。「二」には上平(今の第一声で、「みつつ」の意)と去声(第四声で、「しばしば、なんども」の意)があ

るが、ここでは後者の声調で読むという指示。

- (42) 三跋羅 || 動詞 sam > bhr (集める・用意する・維持する・養う等) の命令法・二人称・単数・他動態 sambhara。「集めたまえ」「保ちたまえ」「養いたまえ」等の意。
- (43) 吽 || 聖音 hūm の首写。訳出は困難。「諸尊に共通する種子(諸仏・諸尊を象徴的にあらわした梵字)」ともいわれ、また忿怒の相を象徴する音ともいわれている」(『禪宗の陀羅尼』p.118)。
- (44) 檀波羅蜜 || 布施(ほどこし)の完成。布施を完全なものにする」と。〔中村』p.943〕
- (45) 飲麩 || 未詳。麦粉や米粉を湯や水に溶いたものか。麩は「むぎこがし。麦や米をいり、ひいて粉にしたもの」(角川『新字源』p.1161)。
- (46) 多宝如来 || 不空訳『瑜伽集要教阿難陀羅尼焰口軌儀經』(以下『瑜伽集要經』と略記)に拠れば、「諸もろの仏子等、若し多宝如来の名号を聞かば、能く汝等をして財宝を具足し、意の須うる所に称いて、受用すること無尽ならしめん」(T21・471a)と言ふ。
- (47) 異謨 || 前述と同じであるが、ここでの語尾は連声形の〇となつてゐる。以下も同じ。
- (48) 異謨婆… || 以下、四如来の陀羅尼の読みは、原則として『真言陀羅尼』(p.224 ~ 226)所掲の「五如来宝号召請陀羅尼」の「慎用音」に従い、反切などで指示がある箇所はそれに従つて変更を加えた。この陀羅尼は文字の異同はある

が、『五如来宝号招請陀羅尼』の中の「多宝如来」の陀羅尼に相当する。還元梵文は「namo bhagavate prabhutaratnaaya ratnagataya」であり、和訳は「世尊〔すなわち〕多くの勝れた宝を持つ如来に帰依致します」となる。

(49) 去||婆(Ba)は下平だが去声(第四声)で読めという指示。

(50) 婆誡喇帝||婆誡縛帝||形容詞 bhagavat(尊敬すべき・崇拜すべき・神聖な)の男性・単数・与格形 bhagavate。「世尊に」の意。以下も同じ。

(51) 鉢囉部哆囉怛曇野||形容詞 prabhuta(多量の・勝れた・現れた)と名詞 ratna(財宝・宝石)の複合語 prabhuta-ratna(多くの宝を持つもの・勝れた宝を持つもの・宝を現するもの)の男性・単数・与格形 prabutaratnāya。「多くの宝を持つもの(=多宝)に」「勝れた宝をもつもの(=宝勝)に」の意。

(52) 怛佉嬰哆野||名詞 ratnagata(如来・如去)の男性・単数・与格形 ratnagatāya。「如来に」の意。以下も同じ。

(53) 嚩||注(39)参照。

(54) 妙色身如来||『瑜伽集要経』には「諸もろの仏子等、若し妙色身如来の名号を聞かば、能く汝等をして醜陋を受けず、諸根具足、相好円満、殊勝端嚴にして、天上人間、最も第一と為らしめん」(T21・471a)とある。

(55) 曇讀婆誡縛帝::||以下の妙色身如来の陀羅尼の意味は、「世尊〔すなわち〕美しい容姿を持つ如来に帰依致します」で、還元梵文は「namo bhagavate surūpā ratnagatāya」となる。

(56) 素嚩播野||接頭辞 su(美し)・妙なる)と rūpa(いろ・か

たち)の所有複合語 *surupa* (美しい姿をもつもの)の男性・単数・与格形 *surupāya*。「美しい容姿のもの」の意。

(57) 具足 ①十分に備わること。具備に同義。得るの意。②円満に同じ。また完全の意。それぞれの用法として、③「具足して」は「完全に」の意。④「具足せば」は「詳しく言えば」の意。⑤「具足し」は「いっぱい」の意。(『中村広説』上p.336)

(角川『新字源』p.98)

(58) 広博身如来 ㊦『瑜伽集要経』には「諸もろの仏子等、若し広博身如来の名号を聞かば、能く汝等餓鬼の針のごとき咽をして、業火、焼くを停めて清涼通達し、受くる所の飲食、甘露味を得しめん」(471a)とある。

(59) 曇謨識喇帝 一： ㊦以下の広博身如来の陀羅尼の意味は、「世尊〔すなわち〕長大な手足を持つ如来に帰依致します」で、還元梵文は「*namo bhagavate vipula-gātrāya rathagātrāya*」となる。

(60) 尾補羅識恒囉野 ㊦形容詞 *vipula* (大きい・広い・長い・厚い)と名詞 *gātrāya* (身体・手足)の所有複合語 *vipula-gātra* (長大な手足をもつもの)の男性・単数・与格形 *vipula-gātrāya*。

(61) 離怖畏如来 ㊦『瑜伽集要経』には「諸もろの仏子等、若し離怖畏如来の名号を聞かば、能く汝等をして常に安楽を得、永く驚怖を離れて、清浄快樂ならしめん」(471a)とある。

(62) 曇謨婆去(声) 識喇帝 一： ㊦以下の離怖畏如来の陀羅尼の意味は、「世尊〔すなわち〕恐怖をなからしめる如来に帰依致します」で、還元梵文は「*namo bhagavate abhayam-karāya*

cahagataya」となる。

(63) 上「阿」は平声・上声・去声の三つの声調があるが、その中の上声で読めという指示。

(64) 阿婆孕迦囉野Ⅱ形容詞 *ahaya* (畏れの無い・安全な・確実な) の中性・単数・対格形 *ahayan* と名詞 *kara* (為すこと・作ること) の格限定複合語 *ahayan-karaya* の男性・単数・与格形 *ahayan-karaya*。「恐怖なからしむるものに」の意。

(65) 去Ⅱ注(49)参照。

(66) 族姓子Ⅱ、良家の子。正しい信仰をもつ人。立派な男子。善良な紳士。普通は在家の男性に対して用いる。善男子に同じ。2、比丘のことを称していることもある。〔『中村』 p.890〕

(67) 優婆塞Ⅱ在俗の男性信者のこと。もともとの語源は、仕える人ないしは奉仕する人の意で、出家修行者に仕え、その世話をする人々の一般名詞であり、インドでは全ての宗教に共通する名称であった。梵語 *upasaka* の音写。漢訳は清信士、近事男、善宿男、近善男。〔『中村広説』上 p.110〕

(68) 優婆夷Ⅱ在俗の女性信者。信女。優婆塞に同意。 *upatika* の音写で、清信女、近善如、近事女、近宿女と漢訳する。〔『中村広説』上 p.110〕

(69) 真言Ⅱ密教でいう真実絶対のことばで、仏や菩薩などの本質を表す秘密の語。漢訳では呪、神呪、密呪、密言という。呪・陀羅尼と同義に用いられるが、ときとして、陀羅尼の短いものを指し示すことがある。〔『中村広説』中 p.949〕

- (70) 加持^ニ祈祷、またはその儀式をいう。本来は加持と祈祷は全く異なった概念である。加持は adhiṣṭhāna の訳で、確立ないしは決意の義から転じて加持の意味に用いられる。祈祷とは仏菩薩の冥助を求めて招福攘災を祈念することである。密教では加持に対して特殊な解釈をして「加」とは仏の大悲大智が衆生に加わること、「持」とは衆生がこれを受持することであるとするが、またある効験を願って特定の陀羅尼や印契を修して、その効験を念じるといった呪術作法をも意味するようになった。そして、これが転じて祈祷と同義に用いられるようになったのである。(今泉淑夫編『日本仏教史辞典』p.133)
- (71) 百千俱胝・百千俱胝恒河沙数・百千恒河沙^ニそれぞれ無限、数え切れないを表現する語。(『中村広説』上 p.429 等参照)
- (72) 色力^ニ身体の力。(『中村広説』中 p.638)
- (73) 善根^ニ功德のもと。良い報いを受くべき善行、すなわち正しい行為を意味する。善を樹の根に喩えている。(『中村広説』p.1030)
- (74) 夜叉^ニ八部衆の一つで、もともとは人を食らうなどの悪事を事とする鬼神であるが、須弥山の北方に住する毘沙門天(多聞天)の眷属としての夜叉は、帝釈天の眷属としての仁王尊などの夜叉とともに、仏法守護の良き鬼神とされている。また、しばしば羅刹と併称される。(『禅学』p.1236' 1237)
- (75) 羅刹^ニ悪鬼の通名。人畜の血肉を食らい、空を飛び、地

中を歩き、その行動は敏捷にして畏れられた。普通には夜叉羅刹とか悪鬼羅刹というようにしばしば併称されて用いられる。〔『禅学』p.1261〕

(76) 婆羅門¹||バラモン。司祭者。印度における四姓(カースト)の最高位。梵語 brahmana の音写。〔『中村広説』下 p.1369〕

(77) 仙²||印度一般に存在する行者。梵語³、漢訳では仙人または聖仙。〔『中村広説』中 p.1021〕

(78) 正解⁴||悟り。〔『中村広説』中 p.845〕

(79) 梵天⁵||仏典では梵天は仏の説法を聴き、仏教に帰依し、仏教を保護する神とされる。〔『禅学』p.1166〕

(80) 怨讎⁶||うらみあう関係になること、また、うらみそのものを意味する語。(角川『新字源』p.363)

(81) 檀婆羅密⁷||梵語 dana-parāmitā の音写。檀婆羅密多とも布施波羅密ともいう。布施(ほとと)の完成。また、布施を完全なものにすることを意味する。

(82) 如法⁸||法にかなひ、理にかなうこと。仏の説いた法とおりの。〔『中村』p.1063〕

【口語訳】

焰口えんくという名の餓鬼を救うための陀羅尼を説く經典

大興善寺の三蔵沙門、大広智不空が詔を頂いて訳す

その時、世尊は迦毘羅かびらの城まちの尼拘律那僧院にくりつなにおいて、諸もろの立派な比丘そくりよや、諸もろの菩薩、無数の聴衆に囲まれ、「彼らの」ために説法を行っていた。

その時、阿難は静かな場所で（釈尊から）受けた法を一人瞑想していた。その夜の夜半も過ぎた頃、焰口という名の餓鬼が現れた。その形は醜陋みにくく、身体は枯れ木のように瘦せこけ、口の中で火が燃え、喉は針の先のように細く、頭髮は乱れ、爪と齒は長く鋭く、とても恐ろしいものであった。

〔その餓鬼は〕阿難の前に立つて申し上げた、「これから三日後にあなたの命は尽きてしまい、この餓鬼（の世界）に生まれるでしょう」と。その時、その言葉を聞いた阿難は、心に恐怖が湧き起こり、餓鬼に質問した、「もし私が死後に餓鬼（の世界）に生まれるというのであれば、どのような方便ほうほうによれば〔餓鬼道に落ち

【口語訳】

面然めんねんという名の餓鬼を救うための神呪じゅもんを説く經典

唐代の于闐うたんの僧、実叉難陀じしやなんだ訳す

その時、世尊は迦毘羅かびらの城まちの尼俱律那僧院にくりつなにおいて、諸もろの比丘そくりよや、諸もろの菩薩、無数の聴衆とともにいた。（彼らに）周囲を囲まれて、「彼らの」ために説法を行った。

その時、阿難は清浄な場所に一人いて、一心に瞑想していた。その夜の夜半も過ぎた頃、面然めんねんという名の餓鬼が現れた。

〔その餓鬼は〕阿難の前に立つて申し上げた、「これから三日後にあなたの命は尽きてしまい、この餓鬼（の世界）に生まれるでしょう」と。その時その言葉を聞いた阿難は、心に恐怖が湧き起こり、餓鬼に質問した、「私にそのような災禍わざわいがもたらされるなら、どのような方計ほうけいを〔実行〕すれば、その苦しみを免れることが

るといふ」その苦しみから免れることができるであらうか」と。

それを聞いた餓鬼は阿難に申し上げた、「あなたが明日、数限りない餓鬼および多くの婆羅門や仙人たちに布施を行うのに、一人一人に「対して」摩伽陀国で使用している斛で一人一人に一石の飲食を与え、さらに私のために三宝に供養するならば、あなたは寿命を延ばすことができ、私にこの餓鬼（の世界）の苦しみを離れて天上（世界）に生まれさせることができるでしょう」と。

阿難は、この焰口（という名の）餓鬼の身形が、やせ細り衰え疲れて極めて醜く、口中に火が燃え、喉が針先のように細く、頭髮が乱れて、爪と齒とが長く鋭いさまを見た上に、このような道理に合わない言葉を聞いてとても驚き怖れ、全身の毛が逆立った。

そして座から立って、急いで仏の所に至り、五体投地して、仏の足を頂礼し、身体を顛慄ながら仏に申し上げた、「願わくは私の苦しみをお救いください。ど

できるであらうか」と。

その時、「それを聞いた」餓鬼は阿難に告げて言った、「あなたが早朝、数限りない餓鬼および多くの婆羅門や仙人たちに布施を行うのに、摩伽陀国で使用している斛で、一人一人に一斗の飲食を施し、さらに私のために三宝に供養するならば、あなたは寿命を延ばすことができ、私にこの餓鬼（の世界）の苦しみを離れて天上（世界）に生まれさせることができるでしょう」と。

〔阿難は、この面然という餓鬼の身形が、やせ細り衰え疲れて極めて醜く、顔面で火が燃え、喉が針のように細く、頭髮が乱れて、体毛と爪とが長く鋭く、身体に重荷を負つ「たように腰が曲がつ」ているのを見た上に、このような道理に合わない言葉を聞いてとても驚き怖れ、全身の毛が逆立った。〕

そして座から立って、急いで仏の所に至り、五体投地して、仏の足を頂礼し、身も心も顛慄せて仏に申し上げた、「私をお救いください、世尊よ。私をお救い

うしてかというところ、私が静かなところにじつとして、「仏より」授けられた法をおしえ瞑想していると、焰口餓鬼が現れて、私に告げて言いました、「あなたは三日たつたら、きつと命がなくなつて、餓鬼〔の世界〕に生まれるでしょう」と。私は〔餓鬼に〕質問しました、「どうしたら私はこの苦しみから免れることができたらうか」と。餓鬼は答えて言いました、「あなたは今、数限りない餓鬼および多くの婆羅門や仙人たちに種々の飲食を施すならば、あなたは寿〔命〕を延ばすことができるでしょう」と。世尊よ、私は今どうすれば若干の餓鬼や仙人たちの食事を工面することができましようかと。」

その時、世尊は阿難に告げて言った、「お前は今、怖れることはない。私によい方便がある。お前に数限りない餓鬼および諸もろの婆羅門や仙人たちに種々の飲食を施すことができるようにさせよう。憂惱するな」と。

仏は阿難に告げた、「『無量威徳自在光明殊勝妙力』』という名前の陀羅尼がある。もしこの陀羅尼を誦える

ください、善逝よ。〔私は〕今から三日たつと命が終おわつてしまします。昨夜、ある面然餓鬼が現れて、私に告げて言いました、「あなたは三日で必ず命が尽き、餓鬼〔の世界〕に生まれるでしょう」と。私は〔餓鬼に〕質問しました、「どんな方計ほうけいで、この苦しみを免れることができるだろうか」と。餓鬼は答えて言いました、「あなたがもし数限りない餓鬼および多くの婆羅門と諸もろの仙人たちに飲食を施すならば、あなたは寿〔命〕を延ばすことができるでしょう」と。世尊よ、私はどうすればこの苦しみを免れることができましようかと。」

その時、世尊は阿難に告げて言った、「お前は怖れることはない。異れた方便がある。お前にこのような餓鬼や諸もろの婆羅門および仙人たちに食事を施すことができるようにさせよう。憂惱するな」と。

仏は阿難に告げて言った、「『一切徳光無量威力』』という名前の陀羅尼がある。もしこの陀羅尼を誦える者

者がいれば、数限りない餓鬼および婆羅門や仙人たち
に上妙飲食を十分足りるようにし、このような人々そ
れぞれ皆なが摩伽陀国で用いる斛で四十九石の食を得
るだろう。

阿難よ、私は前世に婆羅門であつたときに、観自在
菩薩の所および世間自在威徳如来の所で、この陀羅尼
を授かつたので、無量の餓鬼および諸もろの仙人たち
に種々の飲食を分け与え、諸もろの餓鬼を苦しみを受
けている肉体から解脱させ、天上世界に生まれさせ
「ることができ」た。阿難よ、お前は今「この陀羅尼を」
受持おけば、福徳も寿命も共に増長るだろう」と。

その時、世尊は阿難のために陀羅尼を説いて言つた、

「曇莫薩囉」(音は)バ、ドも同じ。但他掲多(音を)伸ばす。(二)三までが)
第一句。嚩路(音を)伸ばす。枳帝(二)三までが第一句。唵(音を)伸ばす。(二)
二までが)第三句。三(音)上(音)で読む。跋羅三跋囉(音を)伸ばす。(二)
三(音)上(音)で読む。跋囉三跋囉(音を)伸ばす。(二)
二までが)第四句。

仏は阿難に告げた、「立派な男子・女人で、長寿で

があれば、数限りない餓鬼および数多くの婆羅門や諸
もろの仙人たちに「食事」を施してしまつたことにな
り、「それらの餓鬼、婆羅門、仙人たちの」前に各おの
摩伽陀の斛で四十九斗の飲食があらう」と。

仏は阿難に告げて言つた、「私は、前世でかつて婆
羅門だつた時、観世音菩薩および世間自在徳力如来の
所で、この陀羅尼を授かつた。私はすぐさまこの陀羅
尼の力で、無量無数の餓鬼および婆羅門や仙人たちの
食(事)を十分に満足させることができた。私は諸も
ろの餓鬼に食(事)を施したので、「餓鬼たちは」その
身体を捨離して、天上に生まれることができた。阿難
よ、お前は今、この陀羅尼を受持て、きつと自分で身
を護りなさい」と。

そこで呪を説いて言つた、

「那摩薩囉」(音は)バ、ドも同じ。但他掲多(音を)伸ばす。大声で読える。
縛路枳帝(二)三までが)第一句。唵(音)上(音)で読える。ドも同じ。跋(音)
は)ハッ、ドも同じ。囉三跋囉(二)三までが)第二句。虎(音)上(音)で読む。跋(音)
は)ハッ、ドも同じ。囉三跋囉(二)三までが)第三句。

仏は言つた、「阿難よ、もしこの食べ物を施す作法

福徳くどくが増ぞう榮かし、速すみやかに布施へんじの行ぎやうをやり遂すげることができ、晨あさ朝あさもどんな時ときもいつでもままったく障しょう礙がいがないことを求めたいと思おもうならば、一つの清せい浄じやうな器きを持もつてきて、清せい浄じやうな水みづを盛もり、飲お麩もや餅もち・飯いなどを少すこしばかり中ちゆうに入れ、右みぎ手てで〔その〕器きを持もつて、先まの陀だ羅ら尼にを満まん七しち遍へん誦じゆえてから、〔次に示しす〕四し如に來にの名な号ごうを称なづえなさい。〕

〔南なん護ご多た宝ぼう如に來に。〕

曇だん護ご婆ば 去きよ声しやう〔で説せつむ。〕 誡ぎ喚わん帝たい〔こゝまでが第一句。鉢はつ囉ら二字を合あわせ

〔て一拍ぱくで説せつむ。〕 部ぶ〔音おんを伸のばす。〕 哆た囉ら恒へん曇だん 字じを合あわせ〔て一拍ぱくで説せつむ。〕

野や怛たん佉か 〔音おんを伸のばす。〕 嬰やう哆た 〔音おんを伸のばす。〕 野や〔こゝまでが第一句。〕

〔多た宝ぼう如に來にの名な号ごうを称なづえて加か持ぢするから、一切いっけつの餓が鬼きたちが多た生じやうにわたつて積つみ重かさねてきた慳けん慳けんの惡あく業ごうを打うちち破やぶることができ、〔餓が鬼きたちの〕罪ざい障じやうが消け滅めつして、即すなはち座ざに福ふく徳とくが円えん満まんにならう。〕

〔南なん護ご妙めう色しき身しん如に來に。〕

曇だん護ご婆ば識しき縛ばく縛ばく帝たい〔こゝまでが第一句。素そ嚩わ二音を合あわせ〔て一拍ぱくで説せつむ。〕

播は 〔音おんを伸のばす。〕 野や怛たん佉か 〔音おんを伸のばす。〕 識しき跋ばつ野や〔こゝまでが第二句。〕

〔妙めう色しき身しん如に來にの名な号ごうを称なづえて加か持ぢするから、諸しよ々の

を實施じつししようと思おもう者は、ままず飲いん食じやくを持もつてきて清せい浄じやうな盤ばん器きの中ちゆうに置おき、この陀だ羅ら尼に呪じゆを誦じゆえて、〔お供おんぐえする飲いん〕食じやくに七しち遍へん呪じゆ文ぶんをかけ、門もんの内うち側がわに立たつて、腕うでを戸かどの外そとに伸のばし、槃ばんを清せい浄じやうな地ぢ面めんに置おいて、指さしを七しち回かい鳴めいらしなさい。〕

餓鬼の、醜く卑しい悪しき姿を打ち破り、そのまま「仏
のような」美しい姿を完全に具えることになろう」。

「南謨広博身如来。」

南謨(ナノボ) 広博身(コウハクシン) 如来(ニョライ) 尾補羅識(ビボラジキ) [音を]

婆譏囉帝(バギヤパテイ) (二) までが (一) 第二句 野 怛佉(音を)

娑修野(サシュヤ) (二) までが (一) 第二句 野 怛佉(音を)

「広博身如来の名号を称えて加持するから、〔針のよ
うに首が細い〕諸々の鬼の咽喉を広げて、施した食物
を欲しいままに〔食べさせ、〕満腹させることが出来よ
う」。

「南謨離怖畏如来。」

南謨(ナノボ) 離怖畏(リフバイ) 如来(ニョライ) 婆(音を) 野(音を) 野(音を)

婆(音を) 野(音を) 野(音を) 野(音を) 野(音を) 野(音を)

野(音を) 野(音を) 野(音を) 野(音を) 野(音を) 野(音を)

「離怖畏如来の名号を称えて加持するから、諸々の
〔餓〕鬼の一切の怖畏を悉く除き去り、餓鬼の世界か
ら離れさせることが出来るであろう」と。

仏が阿難に告げた、「立派な男子たちよ、四つの如
来の名号を称えて加持しおわったなら、指を七遍鳴ら

この施しをなし終わつたならば、その四方に数えぎ
れない無数の餓鬼がいたとしても、その一人一人の餓

して、食器を清浄な地面から取り上げ、腕を伸ばして〔その中味を地面の上に〕注ぎなさい。その施しをなし終わつたならば、その四方に数えきれない無数の餓鬼がいたとしても、その前に各々マガダ国の〔升で〕七七〔四十九〕斛の食べ物があることになろう。〔そして〕この食べ物を受け終わつたならば、みんな腹一杯になり、そのもろもろの餓鬼たちは、ことごとく餓鬼の身を捨てて天上〔世界〕に生まれることになろう。〕。

阿難よ、若し、比丘や比丘尼、在俗の男性や女性の信者がいつもこの真言や四如来の名号を〔唱え、〕食物に加持して餓鬼に施すならば、すぐに〔彼らは〕無量の福德を完全に具えることができるであろう。そして〔この福德は〕数え切れないほどの如来に供養する功德とまつたく変わりなく、寿命は延長し、色力はいよいよ増し、善根は具足わり、一切の人間以外のものや、夜叉、羅刹、諸もろの悪しき鬼神はむやみに害を加えることはなく、また無量の福德と寿命が成就るであろう。

鬼の前に、各々マガダ国の斛で四石九斗の飲食があり、これらの餓鬼たちは誰もがみんな腹一杯になるだろう。〔そして〕この食べ物を食べ終わつたならば、ことごとく餓鬼の身を捨てて、残らず天〔上世界〕に生まれることができるだろう。〕。

また言った、「阿難よ、あるいは比丘・比丘尼や在家の男性や女性の信者がもしも普段一生懸命にこの陀羅尼を唱えて、また飲食を献ずることができたらば、たちまちに〔彼らは〕無量の功德を具足して、寿命を延ばすことができ、たちまちに数え切れないほどの如来に供養した〔のと同じ〕功德を成就し、顔色は清らかで、威徳があつて記憶力も優れたものとなり、一切の人間以外のもの、歩多鬼など〔の鬼神〕や、夜叉・羅刹ならびに諸々の餓鬼は、皆この人を畏れて、見るに耐えられない心持ちとなるであろう。〔そして、これにより〕この人は偉大な力で〔解脱を〕勤め求める〔能力〕を成

もし諸々の婆羅門や仙人たちに施しをしようと思うならば、淨らかな飲食を一つの器に山のように盛りつけて、前の真言を二七(十四)遍唱えて加持し、淨らかな流水の中に投げ入れなさい。このようにやり終わつたならば、天界の諸々の美妙的い飲食を、数え切れないほどの婆羅門や仙人に供養したことになる。かの諸々の仙人たちは加持した食物を得るので、「食物に込められた」呪の威徳によつて、各々のもともとの所願である善功徳を成就して、各々が同時に誓願を發して言うであろう、「願わくは〔我等に〕食物を施してくれた人の寿命が延長し、色力が安樂でありますように。また、その人が心で見聞するところ〔のもの〕が、清淨なる正解となり、梵天の威徳が身にきちんと備わつて、梵天の行が行えますように。また、数え切れないほどの如来に供養〔して得られ〕る功徳と同じように、一切の怨讎が〔その人を〕侵害できませんように」と。

あるいは比丘や比丘尼、在俗の男性や女性の信者が、

就させ完全に具えるであろう」と。

また言つた、「阿難よ、もし婆羅門や仙人に食物を施そうと思う者がいれば、かならず飲食を鉢の中いっぱい盛り、この陀羅尼呪を唱えよ。食物に七遍呪をくり返して〔唱え〕、流水の中に滴げば、数限りないほどの婆羅門や諸々の仙人たちに、天にあるような飲食を具足に献上したことになる。その婆羅門や仙人等はこの食べ物を食べ終わつたならば、五根の不具合はなくなり、円満に〔何欠けることなく〕安穩な心の安らぎを得るであろう。〔そして〕各々その願いを發して〔食べ物〕施した人を〔次の様に〕讚歎するのである、『その食べ物を施した人は、心が清淨となり、速やかに梵天の威徳を証つて、つねに清らかな行いを修め、数限りない如来に供養する功徳を具足に成就して、諸々の怨讎に対して常に勝つことができすように』と。

あるいは比丘や比丘尼、在俗の男性や女性の信者が、

もし仏法僧〔の三〕宝に供養をしようと思うならば、かならず香華と淨らかな飲食をもちい、前の真言を二十一遍唱えて加持して三宝に献上しなさい。この〔供養を行った〕立派な男子と女人は、天のごちそうの〔殊に〕美味なるものを、十方世界に満ち満ちている仏法僧の三宝に献上供養したこととなるし、また、〔三宝を〕讚歎し勸請き随喜ぶという功德〔を積むこと〕となり、つねに諸仏に憶念われ、稱賛され、諸々の天〔上世界〕にいる善き神々がつねに擁護しにやつて来て、すぐさま布施行が満足されるであろう。

阿難よ、汝は私の言葉に従つて教えの通りに修行をし、〔この仏の教えを〕説き広め、諸々の衆生が〔その教えを〕余すことなく見聞して無量の福德を享受できるようにさせなさい。この經典を『救焰口餓鬼及苦衆生陀羅尼經〔焰口餓鬼及び苦しみ衆生を救う陀羅尼の經〕と名付ける。この〔經典の〕名前を、汝は奉持ておきなさい」と。

すべての聴衆および阿難たちは、仏が説くのを聞きおえると、〔この教えを〕心から信奉し、歡喜して実践

もし全ての三宝に供養しようと思うならば、かならず香華や飲食をきちんと準備して、この陀羅尼を唱え、施そうとしている食物や香華などに二十一遍呪をくり返して〔唱えてから〕、三宝に供養しなさい。〔そうすれば、〕これら立派な男子や女人らは諸天の最上の供物やこの上もない供物を〔献上することを〕具足に成就して、すべての如来や〔その如来の〕刹土の三宝を尊重し讚歎し〔たことになり〕、諸仏は〔この善男子や善女人のことを〕深く記憶し、褒め称えるし、〔また〕諸天は〔彼らを〕助け護るであろう」と。

仏は言われた、「去け、阿難よ。きつと自らの身を〔この經典によつて〕護りながら、広く諸もろの衆生のために〔この經典を〕説いて、諸もろの衆生に無量の功德を完全に具備させ、〔将来〕生まれ〔変わ〕る世〔界〕で、いつも教え切れない程多くの諸仏たちに値えるようにさせなさい」と。

〔以上で〕『仏說面然餓鬼陀羅尼經』〔終わり。〕

した。

〔以上で〕『仏説救拔焮口餓鬼陀羅尼經』〔終わり〕

【執筆者プロフィール】

安永祖堂

一九五六年愛媛県生まれ。花園大学卒業。天龍寺国際禅堂師家。大阪府松雲寺住職。花園大学教授。

野口善敬

一九五四年福岡県生まれ。九州大学院博士課程中退。福岡県長性寺住職。妙心寺派教化センター教学研究委員。福岡女子大学非常勤講師。

葛西好雄

一九六五年東京都生まれ。駒澤大学大学院博士課程単位取得。東京都曹洞宗永見寺住職。

並木優記

一九五〇年東京都生まれ。学習院大学大学院博士課程単位取得。東京都金龍寺住職。妙心寺派教化センター教学研究委員。

竹中智泰

一九四五年静岡県生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得。常葉学園大学(教育学部)教授。

朝山一玄

一九五九年島根県生まれ。早稲田大学大学院博士課程単位取得。島根県観音寺住職。妙心寺派教化センター教学研究委員。花園大学非常勤講師。

木村俊彦

一九四〇年京都府生まれ。東北大学大学院博士課程修了。京都府養徳院先副住職。四天王寺国際仏教大学教授。国際仏教文化研究所長。文学博士(東北大学)。

徳重寛道

一九六六年北海道生まれ。北海道大学院修士課程修了。北海道明心寺住職。妙心寺派教化センター教学研究委員。

廣田宗玄

一九六七年兵庫県生まれ。花園大学大学院博士課程修了。兵庫県順心寺副住職。妙心寺派教化センター教学研究委員。文学博士(花園大学)

矢多弘範

一九七〇年大分県生まれ。東洋大学卒業。大分県曹源寺住職。妙心寺派教化センター教学研究委員。

【編集後記】

「読書百遍、意自ずから通ず」と言うが、毎朝お経を誦んでいながら、一向に「通じる」気配がない。南宋の大慧宗杲禪師は「禪は仏の心で、教は仏の口だ（禪是仏心、教是仏口）」（『大慧普說』巻四）と言い、元の中峰明本禪師は「禪は文字を離れた経であり、経は文字がある禪だ（禪即離文字之教、經即有文字之禪）」（『東語西話統集』巻上）と述べられた。だから、禪宗坊主たるもの、せめて自分が唱えている經典くらい「通じる」よう勉強せねばと何時も思いながら、これがなかなか難しい。教学研究委員会ではそぼそと經典の訳注を続けているのは、不勉強ながらもその思いを少しでも遂げたいと考えてのことである。

早いもので創刊号を発刊してから一年が過ぎてしまった。第二号を出すに当たって、怠惰な私と違って日々研鑽を積み重ねておられる諸大徳より、貴重な原稿をたくさん寄せて頂いた。花園大学教授の安永祖堂老師からは禪門の雑誌を飾るに相応しい玉稿を頂戴し、宗門の碩学である竹中智泰師および木村俊彦師からは、お忙しい中ご無理をお願いして、論文と資料紹介をそれぞれ賜った。また、洞門の葛西好雄師からは禪門の戒に関する貴重な研究を載せて頂けることになった。論文を投稿いただいた廣田宗玄師は花園大学大学院の課程博士第一号であり、宗門における新進気鋭の研究者である。諸師に対し心から御礼を申し上げたい。

ただ、諸事情により発刊が大幅に遅れ、寄稿頂いた方々に多大の迷惑をおかけしてしまった。深くお詫び申し上げる次第である。

既に頭の中は第三号の編集のことで一杯だが、特に若い学僧からの投稿を渴望してやまない。「何ごとも意けて得られたためしはない（未曾有二法從懶惰懈怠中得）」（『汾陽禪師語錄』）。宗門を挙げて共に努力していくことを切に願うだけである。尚、英文題目については、長興寺住職・松下宗柏師の御指導を得た。感謝の念を付記したい。

（野口善敬記）

【『臨濟宗妙心寺派教学研究紀要』論文執筆要項】

《テーマ》

臨濟宗を中心とした禅宗に関するもの。

（ただし、仏教全般に互る内容で、宗学に資すると思われるものについては、これを認める。）

《枚数》

原稿用紙四十枚程度（注を含む）

《書式》

・本文は日本語とする。

・縦書きを原則とする。（サンسكريット等の資料を中心とした論文の場合は、横書きも認める。）

・本文・資料共に漢字は原則として当用漢字を用いる。

・資料として書き下し文を用いる場合、仮名遣いは新旧任意とする。

・資料を口語訳した場合には必ず原文を付す。

・ワープロの場合は、打ち出し原稿とテキストファイルのフロッピーを提出のこと。

《応募先》

〒六一六一八〇三五 京都市右京区花園妙心寺町六四

妙心寺派宗務本所 教化センター Ⅷ〇七五―四六三―三二二一代

※封筒の表に「紀要原稿在中」と明記のこと。

《締め切り》

毎年十二月末日（厳守）

《発刊》

翌年四月（予定）

臨濟宗妙心寺派教学研究紀要 第二号

平成十六年 五月十五日 発行

発行人 細川景一

編集 妙心寺派宗務本所教化センター

印刷所 信天堂

発行所 妙心寺派宗務本所教化センター

〒六一六一八〇三五

京都市右京区花園妙心寺町六十四

電話 (〇七五) 四六三ー三二二一

ISSN 1348-3455